

日本はどこへ向かうのか

成田 博

1991年に研究社から刊行された『シヴォレーで新聞配達』は、アメリカの雑誌に掲載された1940年代からの広告に片岡義男がコメントを加えるもので、これはまさにアメリカの社会の歴史をそのまま切り取った趣きがある。そのなかのひとつに、「少なくとも昨夜は、彼女は彼とともに過ごした」という表題の付けられた話があって、これはGilletteの女性用シェイヴァーの広告を扱うものである。若い男女がいて、彼は彼女の膝を枕に眠っている。その背中にノートを置いて彼女はレポートか何かを書いているのだが、強調されているのは、勿論、彼女の脚の美しさである。

片岡義男は、この広告を評して、「日本にも、女性用のムダ毛剃りシェイヴァーは何種類もある。それが雑誌で広告される時、いまから十年あとでも二十年あとでもいいから、ここにあるこのような写真が使用される日が、果たして来るだろうか。そんな日は来ない、と僕は思う」と書いたあと、「なぜなら、この写真に描かれているような人間関係は、日本には存在しないからだ」と断じるのである（同書145頁）。

これを読んで、筆者は、阿部謹也の「世間論」を思い出した。明治元年以降、日本は西洋に近づくことを「近代化」と信じて進んできた。そのようにして150年が過ぎた現在、東京に限らず、日本の大都市を眺めてみれば、日本が西洋となら変わらないという印象を受けるかも知れない。しかし、いかに超高層ビルが林立しても、その基礎にある「人間関係」に変化がないならば、基本的に日本は変わっていないとしか言いようがないのではないのか。

阿部謹也は、「歴史的に見れば日本の個人はヨーロッパの個人とは全然違うものだと思います。／この状態を見て、学者の多くは日本が遅れていると思っているようですが、私はそうは思いません。遅れているとか進んでいるという問題ではなくて質の違う文明、文化なのだと思います」と語っていて（阿部謹也『日本社会で生きるということ』〔1999年、朝日新聞社〕63頁＝斜線は改行を表わす）、それなら、「脱亜入欧」は日本の片思いだったとしか言いようがない（吉川幸次郎は、多くの友人が西洋に目を向けることに反発して中国を研究対象としたのではなかったか）。

我々が実際に生きているのが「世間」であるとするならば、日本の「世間」を出ることができたとしても、その先に西欧化された「社会」が待っていてくれるわけではない。「世間」を出ることはできても孤立するしかない。そもそも「世間」を出たと思っても、また別の「世間」が待ち構えているだけで、永遠に「世間」の外に出ることはできないのかも知れない。法律の理解を困難にする要因のひとつはここにある。たとえば民法は、「（西欧化された）社会」に存在する個人をその基礎に置くが、それは恐らく虚構であって、その虚構性が民法の理解を難しくしているのではないかと筆者は長く疑っている。

『シヴォレーで新聞配達』が刊行されて既に30年近くの時間が経過したが、片岡義男の「予言」は見事に当たったことになる。この先、10年経っても20年経ってもこの「予言」は当たり前続けるだろうと筆者は思うが、果たして、この先、日本は本当にどこへ向かって行くのだろうか。